



Illustration : Takeuchi Kazuya

巢鴨

テクニカルライター
小田嶋 隆

タバコ・ロード

都立小石川高校は、巢鴨の駅から白山通りを南に向かつて十分ほど歩いたあたりにある。

私は、そこに三年間通った。

私が通っていた当時は、まだ都営三田線が開通していなかったで、教師も含めて、ほとんどの生徒たちは、白山通り沿いの歩道を歩いて登校していた。

私は、もっぱら、その白山通りから一本駒込側に入った路地を使った。多少遠回りではあるが、こっちの道のほうが人通りが少なく、気持ちよかったからだ。それに、タバコが吸えた。

そう。喫煙の習慣を持った生徒は、皆、その路地を歩いて学校に通っていたのである。

その道には、いつしか

「タバコ・ロード」

という粋がつた名前がついた。

そして、タバコ・ロードはいばらの道であった。

というのは、その道を歩いていて、知っている顔に出喰わすと、その一日は、丸々アウトになることに決まっていたからだ。

詳しく述べる、タバコ・ロードで出喰わした複数の喫煙高校生は、出喰わしたが最後、互いに、自分が遅刻を恐れていないことを証拠立てるために、極力のろくさと歩かねばならなかったわけなのだ。

お笑いだ。

が、わかってほしい。それは、言ってみれば、プライドの問題だったのである。

プライド。

はっはっは。お笑いである。

プライドは、なるほど、その持ち主である者にとつて、主観的には死活問題であるのだろう。が、客観的に

見れば、それは、いつだって、およそ子供っぽいこだわり（たとえば、ライナスの毛布みたいな）以上のものではない。

ともかく、私はプライドを抱いていた。

都立の進学校に籍を置きながら、喫煙を習慣化させている十七歳の小僧が抱えているプライド。世間並みの言葉でいえば「虚勢」を、だ。

とはいえ、実際問題として、当時の私にとって、通学途中に

「おい、なに急いでんだよ」

と、後ろから声をかけられることが、死ぬほど恥ずかしいことだったというのは事実なのだ。

遅刻を恐れて小走りになっている現場を目撃されること。

これは、恐ろしく身にこたえた。

「なーに必死こいて走ってんだよ、えっ、オダジマ」

ああ。

当時、私と、私の周辺の一派の喫煙高校生たちは、走るといふことに代表される動作や態度を心の底から軽蔑していた。だからわたしは

「ご苦労なことだね」

と、ことある毎に言った。

哀れな少年だ。

二百年も生きている老人みたいな口のきき方をすること、現在に対する不満と、未来に対する不安から逃れようとしていたのだから。

ああ。

通学路で知り合いに出喰わして

「どっするの。」

と言われるのも、やっかいな話だった。

そう言われたが最後、

「ダルいからフケちまおうぜ」

放牧場の三年間

と答えないわけにはいかなかったからだ。だって、そういうきまりになっていたんだから。

かくして、二人の高校生（その二人の待ち伏せによって、人数が増える場合も多かった）は、登校路を外れて、パチンコ屋の開店に並び、あるいは雀荘の門をくぐり、あるいは、池袋行きの山手線に乗ることになった。おぼえておこう。

プライドは、いつでも人を間違った場所に連れて行く。そして、その失敗を責めるのもプライドなのだ。

ところで、教師は、無駄な摩擦を避けて、その道を通ることをしなかった。

無駄な摩擦！

我々が入学する前の数年間、われらが小石川高校は、無駄な摩擦のまっただ中にあつた。

いわゆる「高校紛争」というのがそれだ。

全共闘の影響下にあるヘルメットの高校生たちと、お上の給料を貰っている教師たちは、あらゆることのいちいちについて不毛な議論をくりかえし、あぐくの果てに机を積み上げ、ガラス窓を破壊し、出席簿を破き、すんでのところ、すべてを白紙に戻したのである。

であるから、我々が入学した時点での小石川高校は、制服はもちろん、上履き下履きの区別もない無校則の学校になっていた。理系／文系のクラス分けもなければ、出席さえろくに取られず、科目選択の仕方次第では、土曜日を休みにすることさえ可能だった。

つまり、我々の高校は、教育を放棄していたのだ。

このことは、一面、学生側の勝利ではあった。

事実、我々は自由だった。私自身、素行や成績について学校側からうるさいことを言われたことは一遍もないし、喫煙、飲酒、遅刻、欠席といったような逸脱行

YAMANOTESSEN

巢鴨

HIZAKURIGE

動も、総じて、「個人の裁量」に委ねられていた。たとえば、私のクラスの担任は、修学旅行にあたつて、

「酒を呑むなとは言いません。ただ、私の見ている目の前で呑まれると、まあ、立場上具合が悪いわけです」的な演説をした。

そして、バスの中で一部の生徒がタバコを吸いまくっているという事態に対して、彼は、「最前列に座って、決して後ろを見ない」という対応を示した。校長も同じだった。

校門前でくわえタバコの私に出喰わした時、彼は、ポンとひとつ私の肩を叩いて、通りすぎて行った。

これらのエピソードは、あるいは素敵な話（自由とか独立自尊とか）として受けとめられるかもしれない。特に、全共闘世代のリベラルさんたち（↑ばか！）は、無条件で拍手をしてくれるかもしれない。

が、当事者であった私は、自分の高校時代が無条件に素敵であったと、簡単に言う気持ちにはなれない。なぜというに、私が三年間を過ごしたあの場所は、「解放区」というよりは、むしろ「放牧場」に近い、単に無責任なだけの教育機関であつたかもしれないから。だ。

ともかく、その放牧場の三年間で、私の人間としてのタガは、根こそぎにゆるんだ。そして、以来、そのタガは、二度と締まることなく、現在に至っている。因果な話だ。

しかも、やっかいなことに、私は、自分が都立校の人間だということに、あるプライドを抱いており、さらに因果なことには、どうやら母校を愛している。が、もちろん、その愛情は、五十％内外の恨みを含んでいる。

別れた恋人に対する思いにも似て……ってか。◆